

## 血ぞめの餅もち

むかし、上岩瀬の上原家の男衆は、堂城どうざいなり稲荷の近くの田んぼに行く日になるときまって「腹がいたい」「あんべえが悪い」と出かけたがらない。不思議に思っただんながよく聞いてみると「稲荷様のエノキに大蛇がとぐるをまいている」という。そこでだんなは先祖伝来の七十センチもある名刀を、小わきにかかえ稲荷様にやって来た。いるわ、いるわ、トグロをまいた大蛇が大きなイビキをかいて……。

七百年も経ている様に大きい蛇だ。先祖が武士であっただんなは、勇気をふるって刀の先で蛇をついてみた。目を覚さました蛇は怒って、かま首を持ちあげだんなをにらみ、にわかだんなに向ってきた。やっとの事で医王寺いおうじに逃げこんでホットしてひよいと塀へいをみると。大蛇は今まさに塀へいをのり越えようとしている。だんなは意を決し大刀を振りまわし夢中で大蛇の体をズタズタに切りまくってしまった。

大蛇の死体は七もっこ半しちほら（リヤカー三台分位）もあったので芝原しはらにうめ祠（ほこら）を建てて、ねんごろに供養した。

それ以来、上原家で餅をつくとき、必ず白い餅に血がまざるので三百年たった今でも、隣の家で餅をついてももらって

いるそうです。その他、色々なことが起るので上原家でも百年前にこの大蛇を「龍頭大明神りゅうどうだいみょうじん」として祭り、祠をつくったということです。

